

馬橋おんだし

先の号で、高円寺の千代田村を紹介しましたが、ここではその千代田村を出て青梅街道を渡り、五日市街道の分岐点についてです。この出会う処を、「馬橋おんだし」と呼んでいたのです。今でもきつと高齢な方ならご存じのことと思います。杉並にはこんな「おんだし」と呼ばれていたところが馬橋以外にも、田端おんだし・観音おんだしなどがありました。

五日市街道には、名の通り五日市まで、四十二キロの道で、江戸時代の初期に出来たといわれ、政治的にはあまり重要ではないのですが、木炭とか作物などを運ぶ産業道路で砂利道、青梅街道脇道、同じく裏道、小金井街道、長新田道、五日市みちなどいろいろ呼ばれていたそう、五日市街道と呼ばれるようになったのは明治以後のことなので。

それでは「おんだし」とは何のことでしょうか。

五日市街道の両側がまだ農村であったところは、お百姓さんなどはとれた野菜などを荷車に積んで市内の市場へ出荷するのがそれは大変で、今のように舗装されてはいませんが、この荷車を家族などが後押しをして、この青梅街道へ出したのですが、これが「おんだし」の語源なのです。

かつてこの角にあった自転車屋も今は立派なビルに変わってしまいましたが、故有吉和子さんが作品「恍惚の人」を著した時は「まだ昔の自転車が今見たらさぞ面くうね。」



押し出し